

## 源氏物語竹河巻「手にかくる」の和歌の本文異同と 解釈

工藤, 重矩  
福岡教育大学 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/2202924>

---

出版情報 : 語文研究. 124, pp.1-13, 2017-12-25. 九州大学国語国文学会  
バージョン :  
権利関係 :

# 源氏物語竹河卷「手にかくる」の和歌の本文異同と解釈

工藤重矩

## 一 はじめに

いまここに取りあげる竹河卷の和歌

手にかくる物にしあらは藤の花まつりまさる色をみま  
しや（大島本）

には傍線部の二箇所本文異同が見られる。

第一に、初句の「かくる」を尾州家本等は「かゝる」とする。この本文異同は字形類似による誤読・誤写に起因すると考えてよいと思うが、どちらが原形かの判断が難しい。

第二に、第四句の「まさる」を尾州家本等は「こゆる」とする。この異同については早くから問題にされてきたが、現在の諸注釈書は大島本のままに注を付している。

また諸注釈書は「ば……ましや」の解釈を誤っている。そこで、第四句の本文異同を中心にこの和歌の解釈を再検討し、「こゆる」の方が穏当な本文であることを述べる。

## 二 「手にかくる」の和歌の解釈の問題点

### 1 現行注釈書の解釈

かの和歌が詠まれる場面。玉鬘は、頼みの夫大臣も故人となり、請われてやむなく娘大君を冷泉院に参らせた。その冷泉院は薫を明け暮れ御前に召したので、薫は大君とも馴れ親しみ心寄せあり顔にもてなし、内心では大君は私をどのように見ているだろうかなど、懸想の気持が生じてきていた。そのような冷泉院でのある夕暮、薫は藤侍従（大君の兄弟）と

連れだつて、大君の部屋の前近く、苔むす石に座して、五葉松に懸かる藤花を眺めつつ、大君のことを恨めしげに語り、「手にかくる」の和歌を詠む。そのあたりの本文を大島本（註）に句読点濁点を付し、漢字を当てて示す。和歌以外の本文異同は論旨に関わらないので、言及しない。

夕暮のしめやかなるに、藤侍従と連れて歩くに、かの御方の御前ちかく見やらる、五葉に、藤のいとおもしろく咲きか、りたるを、水のほとりの石に苔をむしろにてながめる給へり。まほにはあらねど、世の中うらめしげにかすめつ、語らふ。

手にかくる物にしあらば藤の花まつよりまさる色を  
みましや

とて、花を見あげたる気色など、あやしくあはれに心苦しく思ほゆれば、我心にあらぬ世の有様にほめかす。

紫の色は通へど藤の花心にえこそか、らざりければ  
まめなる君にて、いとおしと思へり。

まずは近年の注釈書のこの和歌の解釈を示す。

○玉上琢彌『源氏物語評釈』（角川書店、昭和六二年版）

手にとれるものなら、あの藤の花が緑の松よりもきれい

に咲いている美しい色をこうして眺めていたりしようか。

○新潮古典集成（新潮社、昭和五七年）

手に取る事ができるものなら、藤の花の、松よりも濃い紫の色をむなしく眺めてみましょうか。私の力の及ぶものなら、姫君を人のものにはしないのに、の含意。

○新日本古典文学大系（岩波書店、平成八年）

手に取ることが出来るものなら、藤の花の、松の緑よりも美しい紫の色をどうして見るだけですまされようかの意。「藤の花」に大君を、「松」に冷泉院を見立て、松にからむ藤ゆえに手がとどかないと嘆く歌。

○新編日本古典文学全集（小学館、平成九年）

（口語訳）もし自分の手にかける事ができるものであつたなら、あの藤の花の、松よりも濃く美しいその色を持たむなしく眺めているだけですまされようか。

（頭注）もし手を出事ができるのなら、むなしく待っていないで、姫君を自分のものとしたらうに、の意。「藤の花」は、大君。河内本は「松よりまさる」を、「まつよりこゆる」とするが歌意は不明瞭となる。

○源氏物語の鑑賞と基礎知識（至文堂、平成一六年）

手の届くものであつたならば、藤の花（大君）よ、松（冷泉院）よりもさらに美しいその色を見ただけで済ませ

ましようか

日本古典文学大系（岩波書店、昭和三十七年、底本書陵部本）は第四句「まつよりこゆる」なので、ここには触れない。

右の注釈書、歌意の取り方はほぼ同じ。新編全集は、旧全集頭注が河内本には「こゆる」とあることを示して

これに従えば、「君をおきてあたし心をわが持たば末の松山波も越えなむ」（古今・東歌 読人しらず）を引歌とし、「藤波」の縁で「こゆる」と言ったとも解せる。

としていた配慮が「歌意は不明瞭となる」に変わっている。

問題は下句の解釈である。はたして下句は「松よりも濃く美しいその色をただむなく眺めているだけですまされようか」（新編全集）のように解し得るだろうか。そもそも「ば……まし」のいわゆる反実仮想の語法の理解として成り立つ解釈だろうか。現行注釈書の誤りは既に原山絵美子も指摘していることだが、まずはこの語法の確認から始めよう。

周知の語法だが、「ば……ましや」の用例を示す。

橋柱なからまし**か**ば**な**がれての名をこそきかめ跡を見ましや

（後拾遺集一〇七二 公任）

この「ましや」は反実仮想であると同時に反語でもあるから、下句は「橋の跡を見るだろうか、いや見ないであろう」の意。実際は、橋柱が残存しているので、橋の跡をみることに

ができています。それを、もし橋柱がなかったならばと仮定して、その時は橋の跡を見なかったであろうと表現した。

このような反語を含む反実仮想の語法を考慮して「手にかくる物にしあらば藤の花まつよりまさる色をみましや」を逐語的に解釈すれば、左のようになるであろう。

もし我が手に懸けるものであるなら、藤の花は、松よりもまさるその色を見るだろうか、いや見ないだろうに。

実際は、手ではなく松に懸かっているのが松よりもまさる藤花の色をいま見ているのだが、表現としては、もし藤花が我手に懸ける物であるなら松よりもまさる色を見ることはないだろうに、と言っている和歌である。「ば……ましや」の語法を忠実に解するかぎり、この理解しか有り得ない。

これに寓意を加えれば、「もし藤花（大君）が我手に懸けるものなら、松より美しい藤花（大君）の色を見ることはない」となる。これは意味をなさない不合理な表現である。さらに松が冷泉院だとするとますます奇妙なことになる。

それで、現行の注釈書は辻褃を合わせようとして、「藤の花の、松の緑よりも美しい紫の色をどうして見るだけですまされようか」（新大系）のように、本文にない語を補い、本文を無視した解釈をしたのであろう。本文の論理は「手に懸けるものならば——（藤花の）色を見ることはない」である。諸

注釈書の解釈は基本のところであつて誤つてゐる。

## 2 「松よりまさる」での解釈は可能か

前節で「松よりまさる」の本文による現行注釈書の誤りを指摘したが、反語を含む反実仮想の語法として「もし藤の花が手に懸ける（或いは「懸かる」）物であるなら、松よりまさる藤の花の色を見ることはないだろう」という理屈は成り立つかを、古注の理解をもたどりつつ確認する。

現実には「手に懸けていない（松に懸かつている）ので、松よりもまさる色を見ている」という状態。藤花が大君を擬えているなら、その藤花が「懸かつている」松は冷泉院と見る（新大系・鑑賞と基礎知識）のは穏当な理解だが、それでは院と大君とを比較していることになり、大君を慕う男の和歌としてはおかしな表現である。

その故か、古注の中には「松よりまさる」の本文に拠つて寓意を考えようとするとき、例えば紹巴抄（『源氏物語古註釈叢刊』武蔵野書院、平成一七年）は次のようにいう。

手にかくる 哥 薫 松よりまさるの時は、薫の身を松に比して也。色もなき心歎。てにしたがへぬゆへ、今まさるかたへなびきたるとにや。

松よりまさるの時はとあるので、紹巴抄は「松よりこゆる」

の方を可としてゐるのであろう。それはともかく、「まさる」の時は「松」は薫で、松の色無きを言うのだとする。そうすると、「今、まさるかたへ靡きたる」というのは、色も無き松（薫）より勝る色のある方即ち冷泉院に靡いたということであるが、そもそも松に懸かつてゐる藤花を見ての歌で、かつ「手に懸くる（懸かる）ものにしあらば」の「手」が薫の手だとすれば、それと対比されている「松」が薫であるはずもない。薫を松に比すのは明白な誤りである。

同様の解釈は早く三条西実隆の弄花抄（『源氏物語古注集成』おうふう、平成五年版。底本は内閣文庫本）に引かれる「牧」に見えている。

手にかくる てにしたがふ物ならば也。松よりは、薫の姫君へ心かけたるを、玉かづらも心よせ給ひしを也。こゆるとあるは、末の松山の心かはる心也。まさると有本の時は、院は我よりまさり給と也。牧

前半は「こゆる」での理解である。傍線部は谷宗牧（注4）の説。薫の身を松に比して、冷泉院は我（薫＝松）よりまさり給ふとの意であろう。この理解は宗牧の弟子である里村昌休の休聞抄（島原松平文庫本）にも見えており、さらに昌休の弟子である紹巴の紹巴抄に引き継がれたのである。

このように「松よりまさる」に拠つて本文に忠実に解釈し

ようとすると、どうしても行き詰まってしまふことは「松よりまさるの時は」云々の注によく現れている。現行注釈書が本文を無視せざるを得なかつたのも同じ事情である。どうやら大島本の本文を疑つてみる必要があるにそうだ。

### 三 本文異同の問題

#### 1 本文の状況

該歌の本文を検討するために諸本の本文を確認する。<sup>(注5)</sup>異同比較の便宜により漢字・仮名の違いは「ー」で示し、見消は二重線を以て示した。

大 手にかくる物ーにしあら・は藤ーの花ーまつよりまさる  
書 てにかくる物ーにしあら・は藤ーの花ーまつよりまさる  
伏 てにかくるものにしあら・はふちの花ーまつよりまさる  
日 てにかくるものにしあら・はふちの花ーまつよりまさる  
陽 てにかくるものにしあら・はふちのはなまつよりまさる  
尾 てにかゝるものにしあら・はふちのはなまつよりこゆる  
高 てにかゝるものにしあら・はふちのはなまつよりこゆる  
御 てにかゝる物ーにしあら・はふちの花ーまつよりこゆる  
保 てにかくるものにしあら・はふちのはなまつよりこゆる  
天 てにかゝるものにしありせはふち<sup>(挿)</sup>□はなまつよりこゆる

穂 てにかくるものにしあら・は藤ーの花ー松ーよりこゆる

第五句「いろをみましや」は漢字・仮名の表記の違いのみであるから、一々の表示は省略する。

日大本「かゝる」は「く」とも読めそう（青表紙本系としては「く」とあるべきところ）。陽明本訂正傍書「こゆる」は「か」とも読めそう。天理本も微妙な字形。他の「く・ゝ」からは「ゝ」か。同本第二句「あ里せは」は判読。見消訂正や傍書の同筆別筆は影印本では判断できない。

右の他『源氏物語大成校異篇』（中央公論社、昭和五四年八版）『源氏物語別本集成Ⅱ』（おうふう、平成一二年）『源氏物語河内本校異集成』（風間書房、平成一三年）によれば、

「かくる……まさる」横山本・池田本

「かくる……こゆる」肖柏本

「かゝる……こゆる」河内本系（七毫源氏・鳳来寺本等）

「かゝる……こゆる」国冬本

「かゝる……まさる」麦生本・阿里莫本

なお、『源氏物語大成』を参考にすると、前掲の本文対照表の大から陽までは青表紙本系、尾・高・御は河内本系、保・天・穂及び国冬本は別本となる。

大雑把に言えば、青表紙本系は「かくる……まさる」を基

本として「まさる」を「こゆる」に訂正或いは「こゆる」を傍書しているものが多い。肖栢本は既に訂正されたかたちを本文としているようである。河内本系は「かゝる……こゆる」である。別本はそのどちらに近いかで揺れている。<sup>(注6)</sup>

## 2 「かくる」「かゝる」の異同

初句の「かくるーかゝる」の異同は「くーゝ」の誤写とみてよいと思うが、どちらを原形とみなすべきであろうか。

松に「懸かる」藤の例は前に引用した竹河本文にも二例<sup>(注7)</sup>あるが、和歌における用例を確認しておこう。

私家集においても（私家集は『新編私家集大成』により濁点を付し適宜漢字を当てる）、例えば

池のほとりに藤のはな松にかゝれる

緑なる松にかゝれる藤なれどおのがころとぞ花は咲きける  
(貫之集I五〇)

のように、藤は松に「かゝる」ものとして詠まれる。

ただし、藤花を客体として詠むときには、修辭等の必要により「かけて」のかたちで詠まれることも少なくない。

松に藤かゝれる家

紫の雲うちなびく藤の花ちとせの松にかけて（懸・托）

こそみめ  
(兼盛集I一七六)

この場合でも詞書は「かゝれる」とあるように、詞書では「松にかゝれる」のかたちである（伊勢集II七七・頼基集I四・忠見集I一九等々）。歌題の漢文表記でも「藤花懸松（松に懸かる）」のかたち（金葉集三三一等）。松を主体（主語）とするかぎりは「かゝる」とならざるをえないのだが、藤花を見る人を主体にすれば、「かけて」の表現も不自然ではなく、こちらにも多くの用例を見出すことができる。

また大和物語一四二段に「継母の手にかかりていますかりければ」とあるように、「かかると」には、頼る、世話をうけるの意がある。竹河巻の和歌の場合も、「手に懸かるものにしあらば」にはその意が掛けられているであろう。直前に「五葉に藤のいとおもしろくさきかゝりたるを」とあるので、それを承けての歌でもあるから、あれこれ勘案して「かゝる」の方が穏やかな本文であると、私としてはそう思う。

原形はひとつに違いないのだが、どちらとも定めがたく、「かくる」を「かゝる」と改訂すべきかは微妙なところ。注釈にさいしては、底本の本文に従い、研究者向けには他本の本文情況を注記するのが穏やかな処置であろうか。

## 3 「まじりまやろ（まじろ）」の異同と解釈

下句「松よりまさる色をみまじや」の青表紙本系の基本は

「まさる」であり、河内本系と別本は「こゆる」であると、一応は整理できる。しかしながら、多くの青表紙本系伝本が「まさる」を「こゆる」に訂正、あるいは「こゆい」の傍書を付しているのは、早くからこの本文が問題とされていたことを示す。あらためて諸注における扱いを見ておこう。

紫明抄・河海抄には注なく、花鳥余情（源氏物語古註釈叢刊）武蔵野書院、昭和五三年）には「てにかゝる……松よりこゆる」の本文により

松よりこゆるは、末の松山浪こゆる心を思よせたり。

の注が付されている。実隆の弄花抄は

てにかくる哥 松よりこゆる 過るイまさるイ 薰哥也  
哥の心今女御事をよめり 又松山の波の心にもよせたり  
とあり、「てにかくる……こゆる」の本文で、「過る」「まさる」の異文をあげている。なお「すくる」の本文を持つ伝本は校本・集成の類には報告されていない。

この後、三条西家流の注釈書である細流抄・明星抄・紹巴抄、また一葉抄においても本文は「松よりこゆる」を選択している。ただし、孟津抄は「まつよりまさる」である。中世源氏学を集大成した岷江入楚も「松よりこゆる」であり、三条西家流の注釈書においてさえも「松よりこゆる」の本文で施注されているのは、青表紙本系の諸本に「まさる」から「こ

ゆる」への見消訂正、あるいは「こゆる」の傍書が多く見られることと対応する現象であろう。

しかしながら、孟津抄が「松よりまさる」を採用するように、この本文もそのまま残り、湖月抄の本文は「まつよりまさる」で「こゆるイ」の傍書のかたちである。「まつよりまさる」の本文も継承されてはいたのである。

ところがその孟津抄（『源氏物語古注集成』桜楓社）は薰の藤侍の方への哥也。心は、女御を我物になしたらばと也。弄松よりこゆる すくるイ まさるイ 又、松山の波の心にもよせたり。

と、弄花抄を引用しており、湖月抄もまた細流抄と弄花抄を引用している。これらの注釈書も実質的には「こゆる」の本文を可としていたのではなからうか。

岷江入楚（『源氏物語古註釈叢刊』武蔵野書院、平成二二年）が引く「箋」（三条西実枝説）には「こゆる」を可とすべきことの説明がある。

箋松山の心アリ。松よりこゆる、可然也。よりの詞、よりもといふ事ニハ不用之。からと云心に用之也。然ば、こゆるにて可然也。

箋の説明は、助詞「より」は、何々よりもという比較には用いない、何々から（起点・経由）の意味で用いる、だから



比較の用法の「松よりまさる」ではなく、理由を示す用法の「松よりこゆる」とあるべきだ、というにある。

現在は「より」にも比較の用法は認められている。それ故、この説明はそのままでは成り立たないが、比較の意味で「まさる」に続く場合は、「何々よりまさる」ではなく「何々にまさる」が多いのも事実である。源氏物語（大成の索引）では「よりまさる」五例（うち三例は「これよりまさる」）、「にまさる」一〇例、宇津保物語では「よりまさる」三例、「にまさる」一二例である。和歌の用例でも、『新編国歌大観』で検索すれば、「より」よりも「に」の方がはるかに多い。箋説はその点を指摘したともいえる。

「より」には比較・理由の両様が存するので、決定的な根拠にはならないが、前章に述べたとおり、「よりまさる」を比較の用法として解釈しようとすると、「松より勝る（藤の）色」という不自然な表現になってしまう。「松より」とあれば、「こゆる」と続くのが穏やかな本文であろう。

#### 4 「松より越ゆる」による解釈

「こゆる」であれば、「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山浪も越えなむ」（古今集東歌一〇九三）を連想するのは自然なことだから、諸注も「末の松山浪こゆる心を思よせた

り」（花鳥余情）という説明になる。藤花を浪に見立てて、玉鬘の大君が、薫ではなく冷泉院に参つたのを「松を浪（藤浪）が越える」と表現したのである。

この和歌は、松に懸かっている藤花を波に見立てて、「藤花（藤波）が松ではなく我が手にかかるものであるならば、藤波も松（松山）を越える（あだし心を持つ）のを見なかつたらうに……」と嘆じた歌である。薫が大君に対してあだし心を持ったと非難するのは言いがかりをつけるに近いが、物語の場面としては、「松よりまさる」ではなく「松よりこゆる」であつてこそ初めて場面に即した穏やかな解釈ができる。青表紙本系諸本が見消訂正・傍書によつて「まさる」を「こゆる」に改めているのは理由のあることだったのである。

明星抄・細流抄等が「我心のまゝならば、よそにはなすまじきと也」というのも概ね正しい方向の説明である。源氏物語提要の「底の心は、姉君を見まほしきとなり」（『源氏物語古注集成』桜楓社、昭和五三年）も大雑把にすぎるが、理解の方向は間違っていない。文脈的にはこの方向の理解しか有り得ない。それゆえ、現在の注釈書も、反語を含む反実仮想の語法には忠実でないけれども、最終的には「私の力の及ぶものなら、姫君を人のものにはしないのに、の含意」（新潮古典集成）のような、古注と同方向の説明になっている。だ

が、この方向で解釈するためには、本文は「松よりこゆる」でなければならぬ。

その点で、湖月抄を底本とし河内本を以て対校した、吉澤義則『對校源氏物語新釋』が「思ふ儘になるものならば、姫君をよそのものにして見ては居るまいに」と口訳しながらも、かの古今集歌を引き、「河内本に従はなければならぬ」（引用は昭和四十六年国書刊行会版による）としたのは、古注以来の流れの終着点でもあった。

本文は「松よりこゆる」を可とする一方で、松山の心は無いとすの宣長の理解をこの項の最後に検討しておこう。宣長は玉の小櫛（『本居宣長全集第四卷』筑摩書房）に

手にかくる云々 松山の意はなし。四の句のこゆるは、たゞよそになる意にいへるのみなり。（四七四頁）

という。宣長は、湖月抄の「松よまさる」の本文は悪く、「松よりこゆる」を良しとする（玉の小櫛巻四）のだが、それでも「末の松山」の意はなく、ただ単に「よそ」（無縁の關係）<sup>（注10）</sup>になつたことを言うのだと解する。

たしかに、大君と薫の間に何も約束は無かつたのだから、大君が「あだし心」を持ったわけではない。末の松山を浪が越えたとされる理由もない。それでも、和歌の表現としては、古今集「君をおきて」の和歌を踏まえていると理解すべ

き措辞である。薫は松に懸かる藤（藤波）を大君に寓して、そのようなていに詠んだのである。

松に懸かる藤花を、末の松山の心で詠む例をあげる。

池にのぞきたる松に藤か、れり

君を思ふあだし心もなきものを池の藤波まつこえにけり

（中務集一二二）

松に藤のか、りたる、車より人々おりてみる

藤波の高くも松にかゝるかな末より越ゆる余波なるべし

（和泉式部集一一九〇）

ともに屏風歌だが、松に懸かる藤を詠むときに、松は末の松山、藤は藤波として詠む類型があつたことがわかる。竹河巻は薫の恋情を詠む場面だから、このような類型によつて、あたかも約束を裏切られたかのように詠まれている。和歌としてやはり松山の意はあるといふべきであろう。

#### 四 和歌の構文——「まさる」の是非の確認

最後に「まさる」による解釈の困難を確認しておこう。

玉上琢彌『評釈』（第九卷三六九頁）は評において「まさる」「こゆる」の異同をとりあげ、「こゆる」であれば、古今集歌を思い浮かべるのは当然としながらも、

解し易い語を解しにくく誤ることは可能性がすくない。字形の点からも似ていないのである。もし一方が一方を写し誤ったのであれば、「まさる」がもとの形で「こゆる」は訂正した本文であろう。その逆は考えにくい。

という。一般論としてはその通りであろう。それ故、原山絵美子はこの文章を引き、「まさる」を正しい本文として解釈の再検討を行っている。原山論文は該歌につき、

もしも大君が自分（薫）と結婚するものならば、冷泉院参院よりも「まさる色」の大君を見るだろうかと嘆じたのである。言い換えるならば、冷泉院に参院したために大君がすばらしく見えるのであって、もしも自分と結婚していたら彼女は今のようにはならなかったと自嘲的に詠んだのである。

という。右の理解の要は「我（薫）が手に懸かる藤の色」と「松（冷泉院）に懸かる藤の色」とを比較しているのだと解した点にある。私にその解釈の論拠をまとめれば、

(1)「…ば…見ましや」の構文を持つ和歌三二首のうち、七首が「よそに見ましや」である。それで注釈書で「こゆる」が「よそ」の意と解釈された。この類似構文にひかれて、解釈しやすい形「こゆる」が生じた。

(2)「山がつの垣ほながらに見るよりは色まさるべき宿に

移さむ」(惠慶法師集八五)<sup>(注1)</sup>のように、場所による花の色  
の優劣を詠んだ和歌がある。

(1)は本文異同発生要因の推測であり、「松よりまさる」の解釈の根拠にはならない。(2)のみが原山論文の「松よりまさる」の解釈を支えているといえる。

場所によって色が勝るとい言いは、(2)の惠慶集の例の他にも「円融院御時御屏風歌」として、

住吉の岸の藤波我が宿の松の梢に色はまさらじ

(拾遺集夏・八四・平兼盛)

がある。住吉の岸の松に懸かる藤浪の色も、我宿の松の梢に懸かる藤花の色にまさることはないだろう、の意。

たしかに場所による色の優劣を詠む歌は有る。だがそのことは「手に懸くる」の和歌を手と松とによる藤花の色の優劣を詠んだ歌だと解する直截の根拠にはならない。惠慶集・拾遺集の場合は、場所による色の優劣という点に誤解の余地のない表現である。竹河巻の和歌はそうではない。

「松よりまさる色を見ましや」の「AよりまさるB」という言い方は和歌の表現類型の一つである。用例は多いが、源氏物語に近い時代の例を三例あげる。

①声はせで身をのみこがす螢こそ言ふよりまさる思ひなるらめ  
(源氏物語螢巻)

②桜よりまさる花なき春なればあたらしさをばものとや  
は見る (貫之集一二七〇)

③かくばかり憂きを忍びて長らへばこれよりまさる物を  
こそ思へ (新古今集一八一 和泉式部)

①は「心には下行く水のわかかへり言はで思ふぞ言ふにま  
される」(古今六帖二六四八)等による措辞。螢の声なき「思  
火」の方が言葉に出す「思ひ」よりも勝つてゐるとの意。②  
は桜花と他花の優劣比較。③は「これ」(現在の憂き物思い)  
と将来の更に憂き物思いとの比較。

時代はやや下るが、「AよりまさるB」により場所による優  
劣を詠む例としては宝治二年百首に

④訪へかしたな庭の秋萩露けさのこれよりまさる宿はあら  
じを (続古今集三二九・鷹司院按察)

がある。これ(この宿)と他の宿との秋萩の露けさの比較。  
場所による露けさの優劣を言うのは明らかだが、措辞として  
はA「これ(この宿)」B「よその」宿」であり、①②③と  
同じくAB同類のものが比較されている。

一方、竹河卷の「手に懸くる物にしあらば藤の花松(A)  
よりまさる色(B)を見ましや」の場合は、上述の「Aより  
まさるB」の類型ではない。つまり、④のような同じのもの  
の場所による優劣の比較とは言い難い。あえて上述の型を当

てれば、A「松(の色)」とB「色」の比較になり、Bの色は  
当然「藤の花(の色)」となる。そうすると、結局は「松(の  
色)」と「藤の花)の色」との比較となり、第一章の「2」  
に検討した問題点に戻ってしまう。

いまのところ原山論文の解釈を是とする根拠を見出すこと  
ができない。反実仮想の語法を活かしている点で検討すべき  
一案と思うが、上述の和歌構文からしても、例外はあるとは  
いえ、無理な解釈ではなからうか。

一般的には、解し易い語(こゆる)を解しにくい語(まさ  
る)に誤る可能性がすくないのも事実だが、この和歌におけ  
る「松よりまさる」はやはり穏当な本文ではない。

## 五 おわりに——注釈書における本文の扱い

これまでの検討によって、下句は「まつよりこゆる色をみ  
ましや」が良いであろうという結論を得た。これは青表紙本  
とか河内本とかの系統を越えたところでの結論であるが、現  
存本文では河内本の本文を可とすることになる。

ただ、青表紙本系の本文がほぼみな「まさる」であること  
は、かなり早い時期からその本文であったと推察される。い  
つ、どのような事情で本文が分かれたのか、それはなお未詳

とせざるをえない。<sup>(注12)</sup>

このような本文の状況にあつて、もし「松よりまさる」の本文を持つ伝本（例えば大島本）を底本に注釈書を作ろうとするとき、対処法は次の四類型に分かれる。それはこの箇所に限らず、一般的対処の四類型であり、実は写本版本における異文に対する処置の類型でもある。

この和歌を例に具体的に言えば、

甲 「まさる」のままに本文を立て、何も注記しない。

乙 「まさる」の本文を立て、「こゆる」を注記する。

丙 「こゆる」の改訂本文を立て、原形が「まさる」であることを注記する。

丁 「こゆる」の改訂本文を立て、原形を注記しない。

甲は大島本が結果的にこれにあたる。本文の提供のみであれば問題は露わにならないが、これに注を加えようとする問題が露顕することは本稿に見たとおりである。

乙は写本では「こゆるイ」を傍書するもの。注釈書では、例えば湖月抄のように、本文改訂はせず、「こゆる」に拠る注を引用することで実質的に「こゆる」を採るべきを示唆するものもある。前引の孟津抄もこれに属する。この箇所に関する現行注釈書の多くはこの型だが、「まさる」で解釈しようとしたために問題を生じている。

丙は写本では「まさる」を見消にして「こゆる」と改訂する伏見天皇本・書陵部本・陽明文庫本等がこれにあたる。

丁は改訂本文のみ。おそらく肖柏本はこれであろう。

写本版本における乙・丙・丁の措置は読める本文を求めてのことである。目的によっては甲や乙を選択するのは当然だが、読むことを目的とした写本・注釈書等にあつては、丙・丁も避ける理由はない。本稿に扱った和歌の場合は、「まさる」の本文をもつ写本を底本としたとしても、本文は「こゆる」と改訂するのがよい。丙にするか丁にするかは注釈書の目的と想定する読者による。<sup>(注13)</sup>

#### 注

注1 『大島本源氏物語』（角川書店、平成八年）による。当該箇所は

『源氏物語大成巻三校異篇』一四八六頁。

注2 原山絵美子「『源氏物語』竹河巻「手にかくる」歌と「むらさき」の歌について」（『お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター研究年報』第五号、平成二二年）は、現行注の誤りを指摘し、新解釈を試みている。その解釈については第四章で検討する。

注3 藤花を大君に擬えんとするのは穏当な解釈だが、「松」はやや問題。冷泉院の松だから「手」と対比された「松」を院と見るのは自然だが、「松よりこゆる」のときは古今集の「すゑの松山」としての松に重きがある。

注4 重松信弘『新攷源氏物語研究史』（風間書房、昭和三六年）伊

井春樹『源氏物語注釈史の研究』（桜楓社、昭和五五年）によれば、宗牧は一五四五年歿。実隆の源氏講義を聴講。宗牧と休閒抄との関係については井爪康之『休閒抄』（源氏物語古注集成22）の解題を参照。

注5

伝本の略号は以下の諸本の第一字。大島本『大島本源氏物語』（角川書店）、書陵部蔵本『宮内庁書陵部蔵青表紙本源氏物語』（新典社）、日本大学蔵本『日本大学蔵源氏物語』（八木書店）、伏見天皇本『源氏物語（伏見天皇本）』（古典文庫）、陽明文庫本『陽明叢書国書篇源氏物語』（思文閣出版）、御物本『東山御文庫蔵源氏物語』（日本古典文学会）、尾州家本『尾州家河内本源氏物語』（八木書店）、高松宮本『高松宮家御蔵河内本源氏物語』（臨川書店）、保坂本『保坂本源氏物語』（おうふう）、天理図書館本『源氏物語諸本集二（天理図書館善本叢書）』（八木書店）、穂久邇文庫本『源氏物語（日本古典文学影印叢書）』（日本古典文学会）。なお、本文異同の確認は『源氏物語大成校異篇』（中央公論社、昭和五四年八版）『河内本源氏物語校異集成』（風間書房、平成二三年）『源氏物語別本集成第7巻』（おうふう、平成六年）に拠る。

注6

竹河巻では別本に分類される保坂本・国冬本・穂久邇文庫本・天理図書館伝西行筆本が共に同文で一致し、かつ青表紙本・河内本と異なる本文を示すことがあり、遡れば同じ系統の本から派生している可能性もある。

注7

藤侍従の和歌「紫の色はかよへど藤の花心にえこそか、らざりけれ」の傍線部「か、らざりけれ」は日大本「まかせざりけれ」とあり、「か、らい」の傍書がある。『天理善本叢書』源氏物語諸本集二（八木書店、昭和五三年）所収伝西行筆本はもと「か、らざりけり」であるが、傍書、重書き、見消により「ま

注8

かせざりけれ」と修正されている。大島本にも傍書の削除跡がある。他巻にも他本の傍書を削除した跡が多く残るが、こども「まさる」「こゆる」の適否を検討しての措置ではあるまい。

注9

湖月抄の弄花抄引用、内閣文庫本（源氏物語古注集成）には同内容の注があるが、『翻刻平安文学資料稿』の底本である平瀬家旧蔵本には見えない。

注10

古典大系の説明は玉の小櫛に近い。古今集歌も指摘するが、松山の心には言及しない。

注11

冷泉家時雨亭文庫本は「なでしこ」ではなく「鳥の子のやうなる瓜」（新編私家集大成）だが、論旨には関わらない。

注12

例えば、名義抄は「愈」に「イユ マサル スクル コユ カシコシ」の訓を示すが（法中八七）、このような語義の近似も異文発生の一因であろう。

注13

概ね新編全集は㊦、新潮古典集成は㊧であるが、新大系は㊨と㊩（青表紙他本多く何々、の類）の併用。

（くどう）しげのり・福岡教育大学名誉教授